

ア  
ウ  
ト  
リ  
チ

通信



第11号

2008年6月1日発行  
年3回発行

神戸女学院大学音楽学部  
アウトリーチ・センター

〒662-8505

西宮市岡田山4-1

電話・FAX：0798-51-8584

子どものための  
コンサート・シリーズ

第二十回 スペシャル・コンサート



三月八日(土)、本学講堂にて「子どものためのスペシャル・コンサート」コンサートラバスの魔術師ゲリー・カー登場!」を開催しました(午後四時開演、来場五百五十名)。  
「子どものためのコンサート・シリーズ」の記念すべき第二十回は、世界的なコントラバス独奏者ゲリー・カ

ーとピアニストのハーモン・ルイスをお迎えしてのコンサート(司会・コントラバス/南出信二、通訳/藤本しの)、このシリーズでコントラバスにスポットが当たるのは初めてです。

コンサートはゲリー・カー氏の日本語のあいさつで幕を開けました(彼らは大の親日家で、ここ数年熱心に日本語を勉強しています)。

まずハーモン・ルイス氏のオルガン伴奏でブロッホ《ユダヤ人の生活より》から第一番《祈り》。決して子ども向きの曲ではありませんが、聴衆はカー氏独特の深い音色に一気に惹き込まれます。続いてポツテジーニ《タランテラ》。超絶技巧の難曲ですが、曲想にあわせてカー氏の表情も豊



かに変化します。



曲間には日本語も交えたユーモアたっぷりのカー氏のお話が入り、テンポのよい通訳(藤本しの氏)でコンサートが進められました。サン・サーンス《動物の謝肉祭》より《白鳥》では歌心にあふれる演奏に子どもたちも魅了されている様子。次にエックレス《ソナタイ短調》より第一楽章と第四楽章。第四楽章ではアイマスクで目隠しをして演奏するなど、サーピス満点の演出で聴衆を楽しませます。  
ローレンツィーティ《ガヴォット》は、カー氏がこの曲に合わせて作った

物語「どうさんとハエ」のお話をしながらの演奏。小さなハエが大きになろうに恋をして最後に両想いになるという物語ですが、的確な通訳と子どもの目線に立った話術で楽しい時間となりました。次は雰囲気を一転して、クーゼヴィツキー《悲しい歌》。最初と最後の悲しい旋律の部分では子どもたちに鼻をすする音で共演させますが、中間部では情感あふれる演奏に客席もぐっと集中していました。

コンサートは休憩なしに続けられます。会場からお子さんを一人選んでの楽器体験では、弓を握らせてカー氏が右手でサポート、左手で《きらきら星》の音を押さえてルイス氏の伴奏で演奏しました。続いて、南出信二本学非常勤講師とコントラバスの二重奏で、グリーンズ《スケルトン》、アイルランド民謡《ロンドンデリーの歌》、スコット・ジョプリン《エンターテイナー》の三曲を演奏。《スケルトン》では曲想が変わったと思うところで手を挙げさせるなど、子どもたちを飽きさせ



ない工夫が入ります。最後の曲は、パガニーニ《ロッシーニの〈エジプトのモーゼ〉による変奏曲》。ヴァイオリンのために書かれた難曲でも、カー氏のコンサートバスは軽やかに歌います。鮮やかなテクニクと、時折入る楽しい演出で華やかに締めくくりとなりました。

ここで質問コーナーです。子どもたちからの「何時間練習しますか?」「他の楽器も演奏できますか?」などの質問に全て日本語で答えて下さって会場は大いに盛り上がりました。会場の二人のお子さんから出演のお二人に花束贈呈のコーナーも設け、最後にアンコールとして中田章《早春賦》が演奏されてコンサート終了となりました。



終演後の楽器体験は、ヴァイオリンとチェロ、コントラバスの三種。スタッフの指導で音を出してみる子どもたちの目はキラキラしています。ヴァ

イオリンは子どもの体にあつた分数楽器を取り入れたので、無理なく構えて体験してもらうことができました。

今回、カー氏の「客席の反応をみてその場で臨機応変に演奏曲目を選びたい」との意向により当日配布のパンフレットには曲目を掲載せず、演奏が始まったらその都度確認しながらプロジェクターで会場の壁に曲目を映し出すという形を採りました。プログラムはリサイタル並の本格的なものでしたが、随所に子どもたちを楽しませる演出が盛り込まれていました。

カナダ在住のお二人の来日にあわせて急遽開催が決まったコンサートでしたが、広報開始からわずか二週間で定員を超えるお申し込みを頂くなど、大きな反響を呼びました。カナダやアメリカではもう二十年以上も子ども向けのコンサートを続けてこられたそうですが、日本で公式に行うのは今回が初めてとのこと。終演後、カー氏は「日本の子どもたちの反応がすばらしく、舞台と客席が一体になったことに驚いた、大変うれしい」と喜んでいました。お客様からも「子どもを惹きつけるキャラクター、お話やアイデアがすばらしい」「一つ一つの音がとても響いてきれい」「コントラバスのことがよく分かった」「子どもたちは音楽の楽しさを体験できて、大人も楽しめる

素晴らしい企画」などの感想を頂きました。

今回のゲーリー・カー氏招聘に当たってご協力頂いた方々に厚く御礼申し上げます。  
(中村公美・記)

## アウトリーチ実習報告

### 西宮市立西宮浜小学校



続いて猪本隆の歌曲《さざんか》、ヴァイオリンが活躍するリムスキー＝コルサコフの《熊蜂の飛行》、ジョルダノの歌劇《アンドレア・シエニエ》よりアリア《母は死に》と各自の専門を生かした曲を取り上げ、最後にプログラムの《天使の糧》でアンサンブルを楽しんで頂きました。



普段のアウトリーチでは「聴きやすい」「よく知られている」を重視したプログラムを組むことが多いのですが、今回の演奏会は実践発表会に参加された教員の方やボランティアアグルーブの方々が対象だったので、実技試験で演奏するような専門の曲を取り上げて、本格的な演奏をすることができました。皆さんが静かに聞いて下さって、とても心地よく演奏することができました。

ただ宗教色の強い曲が多かったため、曲目紹介の際にそのことを前面に出さないよう内容を考えるのに苦慮しました。演奏側の意図をプログラムに織り込むことも大事ですが、依頼してくださった方の背景も考えてプログラムを組むことの大切さを学びました。  
(松本真奈・記)

三月六日（木）、独立行政法人国立病院機構 刀根山病院（豊中市刀根山五丁目一番一号）作業療法棟フロアで「クラシック・コンサート」心休まる一時をくゝを行ないました（ヴァイオリン・東瑛子、ピアノ・井上香葉、中須賀真弓、杉原真弓、山本佳苗、フルート・片岡朗子、声楽・松本真奈、奥田敏子）。



刀根山病院は、末期癌の患者さんが集まるターミナルケアの専門病院と知って、学生が自分たちの活動の総仕上げとして取り組んだものです。

手作りの飾り付け（持参のレース・カーテンに花や音符をちりばめたり、柱に色テープを巻き付けたり）、楽しい自己紹介（私の家の近所には狸が出ます」「白鵬のファンです）、会場にあった階段（機能回復訓練用）を生かした演出など、みんなの知恵と力を結集しました。

プログラムは（ホール・ニュー・ワールド）で歌い手二人が登場、続いてポ



ルデイーニ（踊る人形）でフルートが登場して各々自己紹介をします。レハーの喜歌劇《メリー・ウイドウ》

の《ワルツ》を二重唱し、最後、階段の上で高らかに歌い上げた後、ひしと抱き合う二人。ピアノリストが促す手を振り払う仕草にお客様から笑いが起こります。ヴァイオリンが登場し、モントエイの《チャルダッシュ》を情熱的に演奏。楽器紹介を兼ねて《キラキラ星》をさまざまな編成で演奏した後、イベル（二つのインテリリウド）より《テングダンテ・エスプレッシヴオ》をヴァイオリンとフルートの二重奏でしつとりと聞かせます。山口景子編曲《日本の四季メドレー》で《ふるさと》《花》《夏の思い出》《赤とんぼ》《雪》を演奏し、曲名をお客様に当てて頂きました。次は唄遊びで《しようじょうじのたぬきばやし》と《かたつむり》を二グループで練習した後、二つの歌を同時に歌います。会場の皆さんも大きな声で楽しそうに何度も歌って下さいました。最後の《川の流れるように》では、何も言わないのに患者さんたちが歌い出して、それに感応したフルートとヴァイオリンが即興演奏で加わ

り、会場が一つに包まれました。アンコールに《カントリー・ロード》を演奏して一時間のコンサートを終えました。



刀根山病院での実習は本学総合文化学科横田恵子先生のご紹介によるもので、実現までには長い道のりがありました。昨年五月に横田先生がお一人で、六月には医療ソーシャルワーカー 織田篤志氏と心理士辻野美千代氏と三人でアウトリーチ・センターに相談に見えました。九月には授業で横田先生から病院の特性と医療の場における音楽の力についてお話がありました。コンサート一週間前には学生たちと病院に伺ってターミナルケア等の講義を受けました。統括診療部長横田

総一郎医師より肺がんとその治療、病棟副看護師長林亜紀氏より看護、織田

氏と辻野氏より心理・社会的サポートについてのお話を伺い、その後、会場で設営や演出等について話し合いました。

学生たちも曲目やトーク内容、演出や役割分担についてよく話し合い、リハーサルを重ねて、心の籠ったプログラムに仕上げられました。その分、充実感も大きかったようで、終演後、学生たちが口々に楽しかったと言っていたのが印象的でした。

三月十九日の卒業式当日、出演した一人一人に病院から花束が届けられて学生はびっくり。「患者様ご家族様に、どんな薬も治療もかなわない楽しさ・心地よさというこの上もない幸をもたらしてくれました」「訓練用の階段がハンナとダニロの愛の舞台に：皆様のおかげでつらい機能訓練が楽しいものになるかも」「四季メドレーや《川の流れるように》ではいろんな思いがこみあげてきたのでしよう、涙する方も多く見られました。患者様も医療スタッフも音楽を通じて一緒にやっついていこうとする連帯感が生まれるように思います」とのメッセージを頂きました。二〇〇七年度最後の実習をこのような形で締めくくることができたことに感謝致します。

（津上智実・記）

アウトリーチ一期生、元本学非常勤講師

絹田 朋子

イギリスの多くの学校では、各学期の半ばにハーフトームと呼ばれる一週間ほどの休みがあります。その時期には子どもを対象にした数々のイベントが催され、子どもたちは休みを楽しく過ごすことができます。ロンドンで二月中旬のハーフトームに行われたイベントから、三つをレポートします。

まず、定番となっているオーケストラの家族向けコンサートを二件紹介しましょう。一つはロンドン・フィルハーモニック・オーケストラ(以下LPO)による「ファミリリー・コンサート」で、二月十七日十一時半からロイヤル・フェスティバル・ホール(二千五百席)で行なわれたもの、もう一方はロンドン・シンフォニー・オーケストラ(以下LSO)による「デイスカヴァリー・コンサート」で、同日二時半からバービカン・ホール(千九百四十九席)で行なわれたものです。

LPOもLSOもロンドンを本拠地とし、国際的な知名度も高い同格の

オーケストラですが、各々個性があり、その違いが今回のコンサートでも感じられました。どちらも開演前には楽器の体験コーナーや、子どもたちの顔にカラフルな色で動物などの模様を描くフェイス・ペイント、コンサートに関連する紙工作コーナーが設けられ、子どもたちはすでにお祭りモード。



LSO：開演前のガムランワークショップ

いざ開演すると、LPOはムソルグスキー作曲/ラヴェル編曲《展覧会の絵》を全曲通して演奏し、曲の成り立ちや楽器をていねいに説明していききました。一方、LSOはコンサートのテーマ「飛行機、電車、そして自動車」にふさわしい小品を多数つなぎ合わせて、オーケストラの迫力とスピード感で会場全体を一つにまとめるといふ方法を探っていました。いずれもブレゼンターが登場して、演奏の合間に曲の成り立ちや作曲者と楽器の関係

を説明したり、聴衆参加の指導をしたりといった役割を果たしていました。

両オーケストラの考え方の違いはつきりと現れたのは、配布プログラムの使い方です。LPOは出演者プロフィール、曲目解説、楽器説明、さらにクイズまでついた読み応えのあるプログラムを開演前に配布しましたが、LSOは曲名と作曲家名だけのシンプルな紙切れ一枚を終演後に配っただけでした。観客へのサービス精神

満点に思えたLPOのプログラム・ノートですが、充実しているだけに読むのに時間がかかってしまい、演奏がプログラム・ノートを読むためのバックグラウンド・ミュージックになつていく場面が見受けられました。また開演後三十分を超えると、小さい子どもたちがじっと座っているのに飽きてしまい、手にしたプログラムをおもちゃにするという風景も見られました。

一方、開演中に持っているのは自作の紙飛行機のみというLSOコンサートでは、ブレゼンターによる曲目紹介はあるものの、あくまで演奏を聴いて楽しむことが主眼とされて、子どもたちはオーケストラの奏でる音により集中しているように見えました。紙飛行機を持った手を曲に合わせて

動かすことによつて、演奏との一体感も感じられたようです。終演後配られた曲目表から、自分が気に入った曲名と作曲家名を探し出して、自分でもっと詳しく調べてみようかと話している子どももいました。一見サービス不足に思えるやり方が、子どもたちの集中度を高めたり、自主的な行動を引き出すきっかけになつていて、大変興味深く思いました。



手回しオルガン

次に、児童文学フェスティバル「IMAGINE 08」をご紹介します。「子どものためのことば、笑い、ジョークそしてゲーム」というテーマで、二月十四日から二十二日まで、著名な児童文学者たちによる八回の公演がありました。会場のクイーン・エリザベス・ホール(約九百席)のロビーには、昔の移動紙芝居屋さんを彷彿とさせるシャボン玉発生機付き手回しオル

ガン(子どもも演奏可)や、落書き自由の壁が用意され、子どもたちは各々考え抜いたジョークを描き綴っていました。自作のジョークと他の子どもが作ったジョークを交換し合い、「目だけのジョーク集」を作る企画も楽しそうでした。

見学したマイケル・ローゼン(一九四六年五月七日生、代表作「きょうはみんなでクマがりだ」評論社、一九九七年)の公演「詩の全て > Poetry」では、ローゼンが得意とするリズム感あふれる詩を次々と舞台から繰り出し、子どもたちも一緒に大きな声を出していました。ゲストとしてローゼンお気に入りの詩人ジョン・アガード(ギニア出身)とヴァル・ブルーム(ジャマイカ出身)が登場し、それぞれの出身国の言葉や伝統的な言葉遊びを紹介しました。子どもたちは聞いたことも見たこともない言葉や動きに初めは戸惑っていましたが、リズムを理解し始めると臨機応変に言葉遊びを楽しんでいました。

私自身も子どもたちに劣らず楽しんでしまったフィリップ・アーダー(一九六一年九月十一日生、代表作「あわれなエディの大災難」あすなろ書房二〇〇三年)の公演では、「詩人

とは、文学者とはどんな人？」というテーマで会場の子どもたちと質疑応答して盛り上がりました。アーダーによれば、詩人や文学者とは「起きて(朝に起きるとは限らない)、トイレに行つて、ご飯を食べて、トイレに行つて、お風呂に入つて、ご飯を食べて、時々出かけて、それで時間が余つたら仕事をやる人」とのこと。子どもたちは妙に納得していました。テーマや質疑応答の内容もさることながら、アーダーの持つ寝起きのクマのような風貌や、どこで息継ぎをしているのか分からないほど凄まじい勢いで喋るスタイルは、観客に有無を言わせる暇を与えず釘付けにするという不思議な力を持つていました。

以上から、音楽のあるなしにかかわらず、子どもたちは「勢いのある舞台」に吸い寄せられることが分かりました。いずれの催しにおいても、スクリーンに中途半端な画像を映したり、フランス語訛りの英語を話すプレゼンターを使ってウケを狙つたりといった小手先の演出は、一時的には子ども達の関心を惹くものの長続きはせず、催しの狙いとは反対の結果に終わってしまう危うさがあるように思いました。

た。対照的に、制作側が自分たちの特徴や長所をよく理解して、そこに焦点を当てた出し物には自然に勢いが生まれ、その勢いに子どもたちが反応して、より印象深いものになっていったように感じました。

## 卒業生の活動報告

### アンサンブル・ちようちよ

アウトリーチ五期生、大学院二年生

谷田 奈央



私たちは「音楽によるアウトリーチ」を履修していた大学在学中から息の合った四人で活動しており、「蝶のように様々な場所へ音楽を届けたい」という想いから二〇

〇七年三月に《アンサンブル・ちようちよ》というグループを結成しました(声楽・谷田奈央、フルート・今井さつき、ピアノ・西村遥子、白坂亜紀)。

楽しいお話  
を交えながら  
クラシックから  
童謡やヒー  
リング音楽まで、  
聴いて下さる  
方々と近い



距離でコンサートを進めるのが私たちの得意なスタイルです。これまでにプラネタリウム、幼稚園、病院、地域のクリスマス・コンサートなど様々な場所で演奏してきました。演奏の依頼を頂くと、先方と密に連絡をとりながら演奏形態やプログラム構成について検討します(「ちようちよ会議」と呼ぶ集まりを四人で開いて話し合います)。

ある保育園では「音楽とお散歩しよう」をテーマに選曲。リムスキー・コルサコフ《熊蜂の飛行》、サン・サーンス《動物の謝肉祭》より《白鳥》、久石譲《となりのトトロ》など、曲に合わせてイラストを作ったり、クラシックが続いても子どもたちが飽きてしまわないよう、最近の子ども向けテレビ番組で流行っ

ているクイズを取り入れたりしました。現在、メンバーのうち三名が音楽教室講師で子どもと触れ合う機会も多いので、子ども向けのアイデアは尽きません。演奏と同じくらいお話にも力を入れています。

コンサート終了後は園長先生をはじめ、たくさんの保護者の方から声をかけて頂きました。子どもたちもダイレクトに反応してくれたり、話しかけたりしてくれました。この瞬間があるから「やっつてよかった！次もさらによいコンサートを作ろう」とメンバー一丸となって次へ進むことができます。

ありがたいことに、一度お世話になった方から再び依頼を頂いたり、ご紹介を頂いたりもしています。繋がり大切さをいつも実感します。多くの方に私たちの活動を知って頂けるよう、ブログ

(<http://yaplog.jp/e—butterfly/>)を立ち上げ、メールアドレス(ensemble.butterfly@gmail.com)を作り、ロゴマークも作成しました(ロゴはアウトリーチ・センター井本彩子さんの作です)。

ート」(十四時間演、入場料千五百円)、八月二十三日(土)には神戸市立青少年科学館プラネタリウムにてコンサートを行ないます(十九時間演、要問合せ)。

これからも、蝶のように様々な場所へ音楽をお届けしたいと思っていますので、ご期待ください。



### 今年度の計画

アウトリーチ・センター長

津上 智実

平成十七年度の文部科学省「特色ある大学教育プログラム(特色G.P)」採択から早二年半、最終年度に入りました。今年度の目標は、地道な日々の教育を通じてアウトリーチ活動の更なる充実を図ると共に、念願の大きな夢を実現することです。

まず「子どものためのコンサート・シリーズ」では、四年生のアウトリーチ履修生による「七タコンサート」(七

月五日)、この春の卒業生でアウトリーチ既習生による「クリスマス・コンサート」(十二月十三日)、そして卒業生の世界的ソプラノ釜岡祐子さんをお迎えしての「子どものためのスペシャル・コンサート」すてきだね、日本語の歌！(神戸公演・十一月二十二日・神戸新聞松方ホール、東京公演・十一月二十四日・東京文化会館小ホール)を行ないます。このシリーズで歌をテーマとするのは初めてで、開演前のロビーで言葉遊び・歌遊びのワークショップを学生たちが展開する予定です。また、事前企画として「子どもの詩コンクール」を四月に実施して、特選入選作には曲をつけて歌として、十一月のコンサートで上演する計画です。東京公演も初めてです。二〇〇

一年春に行なった音楽学部卒業生アンケートで、数人の方から「関西では定評ある女学院も、東京ではそれほど知られておらず悔しい思いをすることがあるので、ぜひ東京でも活動を」との声を頂いて以来、心にかかっています。新たな取り組みとして、この秋、東京音楽大学「アクト・プロジェクト」、

昭和音楽大学「アーツ・イン・コミュニティ」と神戸女学院大学「音楽によるアウトリーチ」の三大学で「音楽の新しい学び」フォーラムを行ないます

(十一月二十三日、東京音楽大学創立百周年記念本館)。これは東京公演で女学院の学生たちが上京するに当たって、「音楽と社会の関係性を重視した教育プログラム」に取り組んでいる他大学と交流したいとの願いに、東京音楽大学と昭和音楽大学が応じて下さったものです。各界で活躍している方々を招いてのパネル・ディスカッションや学生のポスター発表など、充実した交流会になりそうです。

地域社会での活動もこれまで通り地道にていねいに行なっています。学校や幼稚園、病院や福祉施設での活動、英語の歌と遊びの「ひよこプロジェクト」、近隣の中学高校での「吹奏楽プロジェクト」も継続します。

教育の面では、ピアニスト仲道郁代さんの講演ならびに学生とのディスカッション(六月六日)、英国ギルドホール音楽院から講師を招いての創造的ワークショップ(七月下旬)を予定しています。

補助金の最終年度に当たり、三年半の総括の報告書とまとめの映像資料を作ることも大切な仕事です。さらに補助金終了後、アウトリーチをどのようにに展開していくかも大きな課題です。よりよい未来を開くためにも、日々の営みを一つ一つ大切にしていきたいものです。

## センター紹介

病院への実習や子どものためのコンサートを控えた二〇〇八年二月のある一日を、スタッフの目線でご紹介します！

### 八時五十分 出勤

まずメール・チェック。業務連絡を確認し、今日の仕事の手順を決める。



### 十時 アウトリーチ実習の準備

アウトリーチ先の病院から、ピアノが用意できないと連絡が入る。やむなくセンター保有の電子ピアノを使うことになり、運送業者を手配する。駅から

病院までのルートも調べる。

### 十一時 コンサート準備

子どものためのコンサートについてお客様から問い合わせ数件。申込人数の変更はどう対応するか相談して手はずを整える。チケットやプロ



グラムの準備も大詰め。印刷用紙の在庫をチェックして追加注文。

### 十三時 コンサート準備

メールでコンサートのスタッフを募る。経験があつて勝手の分かっている学生と、初めての学生とをうまく組み合わせるのが大切。

### 十五時 広報関連

ホームページ作成を委託している会社から電話が入り、細部の打ち合わせ。アウトリーチ通信「アウトリーチ通信」の発送作業。約千通に送付先住所のシールを貼ってゆく。



### 十七時 業務記録をまとめて終業

アウトリーチ・センターには週五日（月・金）勤務の事務スタッフ井本彩子と、中村公美（月曜、コントラバス）、南香代子（火曜、声楽）、寺澤彩（水・金曜、ハープ）、三上昌子（木曜、声楽）の四名の音楽スタッフが勤務しています。

次にご紹介する担当業務のほか、「子どものためのコンサート・シリーズ」では持ち回りでチーフを務めるなど、五人で力をあわせて「音楽によるアウトリーチ」を支えています。

ズ」では持ち回りでチーフを務めるなど、五人で力をあわせて「音楽によるアウトリーチ」を支えています。



中村、南、三上  
井本、寺澤

### 井本彩子

（印刷物のデザイン、ホームページ）

長年のカメラ音痴を治そうということで、一眼レフのデジタルカメラを購入しました。同僚や学生、建物、植物、はては学内に棲んでいる野良猫にまでレンズを向ける毎日です。

### 寺澤彩（実習アシスタント、記録業務）

ハーブ弾きです♪最近のマイブームは、井本さんのカメラで遊ぶこと。女学院のきれいな自然を撮ってみています。私もカメラが欲しくなってきた今日この頃です。

### 三上昌子（会計、書記）

九十四回音楽専攻、センターでは会計を担当しています。昨年は学生さんたちの成長が頼もしく、スタッフ一年生の私も一緒に右往左往しながら素敵な出会いをたくさん頂きました。今年度も心新たに皆さんと頑張ります。

### 南香代子（実習アシスタント、渉外）

皆様、こんにちは。センターの仕事や、テーマパークで働きながら演奏活動を行っている、南香代子です。専門の音楽を生かしながら、分かりやすいお客様を巻き込む演奏会が出来ればと日々考えています。毎週火曜日にはか姿を現しませんが一つよろしく願っています。

### 中村公美（アウトリーチ通信）

片道二時間の道のりを女学院に通い始めて十年目！普段はコントラバスを弾いています。アウトリーチ通信はワードで作成していますが、とっても地道な仕事です。私のこだわりが詰まっています。

私たちが、皆様と音楽のステキな出会いのお手伝いをします。お気軽にお問い合わせください！

## 今後の予定

### 仲道郁代 レクチャー「ベートーヴェンとイメージ」

ピアニストの仲道郁代さんをお迎えしての講演会もこれで3回目。  
今回は仲道さんがライフワークとして全曲演奏に取り組んでいらっしゃるベートーヴェンについて、その音楽のイメージと演奏という視点からお話を頂きます。豊富な実例を織り込んでのすてきなお話になることでしょう。どうぞご期待ください。

日時：2008年6月6日（金）15：40～17：10

場所：音楽館ホール

講師：仲道郁代（ピアニスト、神戸女学院大学音楽学部アウトリーチ教育アドバイザー）

### 神戸女学院が贈る「子どものためのコンサート・シリーズ」第21回 子どものための七夕コンサート ～きらきら輝く音楽との出会い～

日時：2008年7月5日（土）

第1部 AM 11：00 ～ （年齢制限なし）

第2部 PM 15：00 ～ （小学生以上対象）

出演：「音楽によるアウトリーチ」履修生

場所：神戸女学院講堂

入場料：大人500円、子ども（19歳以下）300円 申込方法はホームページをご覧ください。



## 音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一步踏み出すこと」「手をさしのべること」。

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場ですてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、  
子どものための楽しい体験学習を！

♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽  
プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL & FAX : 0798-51-8584

E-mail : outreach@mail.kobe-c.ac.jp <http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

## 編集後記

岡田山の緑がとても美しい季節になりました。今年もよろしくお祈いします。（井本）

今年度も、学生さん、先生、スタッフの十五人十六脚（!?）で頑張ります！（寺澤）

今年度のスペシャル・コンサートは「日本語」をテーマに歌をお届けします。ご期待ください！（三上）

新年度！また一年、いろんな事に挑戦して邁進だー！（南）

初めてのトップ記事、慣れないので時間がかかって大変でした…。（中村）

今年もさまざまな形でのよい出会いがありますように！（津上）